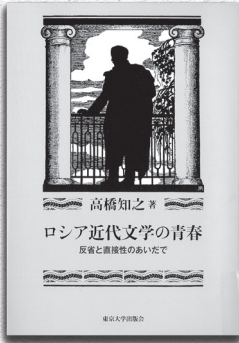


越野 剛



高橋知之著

ロシア近代文学の青春 反省と直接性のあいだで

東京大学出版会、2019年

ソ連が解体して冷戦が終了した1990年代には、社会主義体制から除外された亡命文学やアンダーグラウンドの作家が次々に発掘されたり、ポストモダンの新しい文学が紹介されたりする裏側で、ソ連の公式文学はほとんど顧みられなくなった。19世紀のロシア文学もそのあおりを食い、ロシア革命につながるとされたベリンスキー、ゲルツェン、チェルヌイシェフスキーなどの「革命的民主主義」の流れも研究が更新されない時期があった。西欧派のリベラル思想よりもスラヴ派の宗教的ナショナリズム、リアリズムの社会批判よりもロマン派の幻想小説というように、ソ連時代には評価されなかったジャンルや流派に関心が向かいがちだったこともある。しかしそれから時を経た現在では、文学史の読み替えや更新作業は一段落し、ソ連の社会主義リアリズムの文化さえも新たな関心をもって研究されるようになってきている。本書『ロシア近代文学の青春』は、ソ連時代の文学研究で王道とされたベリンスキーの系譜を清々しいほどに正面から取り上げて論じている。もちろんそれは単なる反復ではない。本書の言葉を借りるなら、ロマン主義的な上昇するらせんの動きによって、それまで見知っていたはずの19世紀の文学史から新しい風景を切り出して見せてくれるのだ。

個我を絶対化するロマン主義の文学は、絶えざる反省によって肥大化した自意識を分裂の危機に陥らせる。反省によって解体した自我は、失われた直接性に回帰しようとする。ロシアの場合はピョートル大帝以来の近代化にはじまって、ある種の近代批判であるロマン主義の問題設定まで、あらゆる知の枠組みが西欧から移植されたものだった。ロシア的な反省の特徴は、模倣性が強く意識されることだ。私とは何であるかという自己同一性の問題が、我々はどこからきてどこに向かうべきかという社会集団のレベルと明確な境界線もなく重なってしまう。ベリンスキーは、レルモントフの『現代の英雄』の主人公に時代の典型的な反省と自己分裂の病を喝破して、現実の社会に「行為」によって働きかけることで、失われた直接性を回復できると信じた。ベリン

スキーからチェルヌイシェフスキー、そしてソ連文学にもつらなるこの系譜を本書では「プロジェクト」と名付けている。

第1部ではこの「プロジェクト」につらなるものとして、1840年代後半に活躍したペトラシェフスキー・サークル、とりわけアレクセイ・プレシチェーフの思想と詩作に焦点を合わせる。1840年代の文学はロマン主義から写実主義への移行期にあたる。実人生と芸術を統合しようとするロマン主義的な仮面は、「プロジェクト」に合わせて作り変えられようとしていた。プーシキンやレールモンツフが好んだ預言者としての詩人像もそうである。しかしプレシチェーフが描き出す「小さな預言者たち」は、ロマン派の孤独な英雄という預言者像と比べると、地味で曖昧なイメージを提示している。しかし逆説的なことに、無個性なキャラクターだからこそ、プレシチェーフの主人公は容易に入れ替えや複製が可能となったという本書の分析は鮮やかだ。サークル内で流通するだけだったはずの文学の言葉が、複製・増殖するイメージの力を借りて、テキスト外の現実やサークルの向こうのまだ見ぬ読者に訴える可能性をはらむのだ。

第2部はプロジェクトと比較可能なもうひとつの系譜を示すことで、1840年代のロシア文学を多角的にとらえる。しかし西欧派と対比させるのにスラヴ派を持ってくるのではなく、アポロン・グリゴリエフという異端の作家に着目したところに独創性がある。現実には働きかける実践によって反省から直接性には向かおうとしたプレシチェーフと違い、グリゴリエフの戦略はひたすら反省をきわめることによって反省を越えようとする「漂泊」だったという。

グリゴリエフは詩人あるいは評論家として知られるが、ここではあえて1840年代のあまり知られていない小説が分析される。ヴィターリン三部作は、断片的なテキストの中に似たような設定の3人のヒロインが登場することなどから完成度の低い作品のようにも見える。しかし同じ性格付けが無個性な装飾のように反復することで、「プロジェクト」の反省から直接性へという発展・成長のプロットは不可能にされる。その代わりに無限の反省という迷宮が開けるのだ。入れ替え可能な人格という仕掛けは、興味深いことにプレシチェーフの「小さな預言者たち」と類似している。もしもプレシチェーフのテキストが読者を実践にむけて送り出す働きをしたら、グリゴリエフの場合は読者を反省の深淵に引きずり込む効果を持つといえるだろうか。プレシチェーフがテキストの外部の虐げられた民衆に届く声を夢想したように、グリゴリエフの男性主人公は反省によって縛られた自己を理想の女性の姿をした「対等な他者」と出会わせることを熱望する。

本書の構想で目を引くのはミクロとマクロのレベルの絶妙な組み合わせだ。第1部と第2部の二人の主人公はロシア文学史ではどちらかといえばマイナーな存在であり、先行研究（とりわけプレシチェーフ論）ではドストエフスキーとの関りに焦点を合わせて言及されることが多い。プレシチェーフは1840年代のペトラシェフスキー・サークルでの活動を共にしたし、グリゴリエフはシベリアから戻った1860年代のドストエフスキーの土壌主義のジャーナリズムに加担した。本書は異能の大作家の存在の影をなるべく踏まないようにする記述のおかげで、プレシチェーフとグリゴリエフそれぞれの精神の内的な発展や時代の座標における立ち位置が浮き上がるような工夫がなされている。

とりあげられている作品も一見すると、独創性に欠けた単調なものに見えるが、その無個性さこそが反省という時代の病に立ち向かう作者の仕掛けであるという発想により、きわめて斬新な解釈が展開された。その一方で、二人の小さな主人公を対比的に観察することにより、それぞれレーモントフとヘーゲルをひとつの分節点とする文学史と思想史の大きな文脈にも大胆な見取り図が提示されている。とりわけ西欧派とスラヴ派の対立関係と外れたところに位置するグリゴリエフを介することで、フォイエルバッハ、キルケゴール、ブーバーを結び合わせる実存主義・対話論的な系譜が可視化される（部分的にはドストエフスキー、バフチンも）。これはユートピアから社会主義に向かう系譜と交差するもうひとつの「プロジェクト」といってよいかもしれない。

壮大かつ細やかな構想に圧倒されてしまいがちだが、本書の何よりもの魅力とは、1840年代という未だ確固たる形を成していない過渡期の知の運動を論じたところである。反省に次ぐ反省、漠たる憧れや迷い、挫折や自意識の暴走にさえも何らかの論理がある。過渡期の詩学、青春の詩学というべきものを本書は問うているのだ。ソ連という巨大なプロジェクトの終焉した「ポスト」の時代をいまだに通過しつつある現在、私たちの行きつく先は見えていない。しかし、そんな状況だからこそ、19世紀ロシア文学の青春がどんなものであったかを顧みる価値がある。